

池泉、石組、枯山水……
庭は地上の「小宇宙」重森千青
Shigemori Chisao

重森庭園設計研究所主宰、京都工芸繊維大学講師。日本庭園についての著述・講演活動ならびに全国で庭園設計に携わる。代表作は、京都松尾大社瑞翔殿庭園、和歌山県長保寺庭園、重森三玲記念館庭園など。著書「京の庭」2003年ウエッジ、共著「ランドスケープの新しい波」メイプルブレス。東福寺方丈庭園をはじめ全国に200もの庭園をつくった名作庭家・重森三玲(しげもりみれい・1896-1975)氏のお孫さん。

紅葉がはじまる11月の京都。11/9(水)から10日間、京都特別講座『京都百景』が開講されます。すてきな講師の方々をお招きし、部分参加も開講します。(P8参照) 11/13(日)に『京都のお庭』の講義と大徳寺をご案内をいただく重森千青先生にお話をうかがいました。

日本のお庭は
日本人独自の創造物

日本の庭園は貴族の館から始まり、その後寺院に庭が作られるようになります。そして庭園職人の活動が室町期以降に活発になり、江戸期に入って庶民(豪商)が庭をつくりはじめるようになりました。

京都の庭園は平安時代から作られ始めましたが、平安期のものは平等院や大沢池(大覚寺)など数少なく、ほとんどが室町以降の作です。竜安寺に代表される禅寺のお庭は、じつは日本独自のもので他国に同じようなものはありません。

5年ほど前、中国の蘇州・杭州の20庭ほどを見てきました。正直なところ写真で見た中国の庭にはしっくり感じる場所がありませんでした。ところが蘇州に着き、その空気ふれ食事をしてその地になじんでいくうち「これもありかな」と感じるようになりました。

気候風土や材料、食べ物などが違えば、意匠や作り方も違ってくるものですね。

石燈籠をお庭に持ち込んだ
茶人・千利休

お庭には必ずといっていいほど燈籠がありますが、鎌倉・南北朝・室町期の燈籠が特に美しいといわれています。燈籠はもともとお寺の中央に置かれ堂内の仏様を照らすものでした。それが桃山期の茶人(千利休といわれている)が、茶室に面した庭に持ち込んで夜のお茶事を行う事などから、燈籠が庭園内に置かれるようになりました。

お庭には燈籠のほか、石組(いわぐみ)、蹲(つくばい)、樹木など見所が豊富にあります。お庭を楽しむには、最初はちゃんとした知識を学んだほうがよいでしょう。さらに先生に同行してもらって現地で説明を受けながら鑑賞することをお勧めします。そして次に、学んだことをいったん忘れて新たな気持ちでお庭と出会ってください。新しい見方やそれまで見つけられなかった美に、新たにふれることができるかもしれません。

(インタビューをもとに編集部で構成)

9月に重森先生のパネル展「庭園の今と昔」を上野を訪ねました。昭和初期と現在の庭とを写真で比較展示したもので「時を経て作庭者の意図が見えなくなっている・・・」と祖父・重森三玲氏がつくった東福寺本坊の写真を見ながらお庭について語ってくださいました。

⇒重森先生とお庭をめぐる「京都特別講座」はP8



まず庭園の基本的な事柄を知り、ある程度見方がわかったら、まっさらな心でまた接してみよう。その時の心の状態によって見えてくるものが変化する楽しみがあります。